

〔漢-14〕 当用漢字音訓表について 日本新聞協会の意見書(回答)

(昭40.1)

当用漢字音訓表は、当用漢字表と一体をなすべきものとして、新聞(放送関係を含む)は、これを原則的に採用しているが、現行の音訓表には、現代国語表記の実情に合致しない点もあって、不便を感じる面が多い(たとえば、資料1, 2, 3)。このような不便・不合理を解消するために、音訓表の全面的再検討が望ましい。

ただし、当面の解決策としては、音訓表のまえがき(使用上の注意)の一部を修正して、制限の緩和をはかることを要望したい(資料4)。

〔資料〕

- 1 使用度の少ない訓が残されていて、使用度の多い訓が採用されていない例。
危=「あやうい」があり、「あぶない」がない。怒=「いかる」があり、「おこる」がない。
魚=「うお」があり、「さかな」がない。訪=「おとずれる」があり、「たずねる」がない。
脅=「おびやかす」があり、「おどす」がない。欲=「ほっする」があり、「ほしい」がない。
- 2 ある訓に対応すべき他の訓がない例。
辛(からい)があり、酸(すい)がない。先(さき)があり、後(あと)がない。
速(はやい)があり、遅(おそい)がない。減(へる)があり、増(ふえる)がない。
悪(わるい)があり、善(よい)がない。
- 3 一般に慣用されている熟字を、その音が認められていないために使用できない例。
街道(カイドウ) 夏至(ゲン) 建立(コンリョウ) 祝言(シュウゲン)
殺生(セツショウ) 聴聞会(チョウモンカイ) 通夜(ツヤ) 不吉(フキツ)
遊山(ユサン) 礼賛(ライサン) (傍線が表外音)
- 4 当用漢字音訓表のまえがき(使用上の注意)の一部を、たとえば次のように修正する。
※(1) 使用上の注意「ハ」項のただし書きの部分「名詞の形だけを掲げているものは、動詞には使わない。」とあるのを、「名詞の形で掲げているものも、動詞に使ってよい。」とあらためる。
(2) 使用上の注意「=」項の「つぎのような熟字は、使ってさしつかえない。」とあるのを、「熟字になって、①清濁が互いに変化するもの、②読みぐせで音訓の伸縮または脱落するもの、③母音交替・音便・音の同化などによって変化するものは、使ってさしつかえない。」とあらためる。

①の例

街	ガイ	←→	カイ(街道)	宮	グウ	←→	クウ(内宮)
財	ザイ	←→	サイ(財布)	惨	サン	←→	ザン(惨殺)

上	ジョウ ↔ ショウ (上人)	代	ダイ ↔ タイ (代謝)
②の例			
脚	キヤク ↔ ギャ (行脚)	景	ケイ ↔ ケ (景色)
従	ジュウ ↔ ジュ (従一位)	除	ジョ ↔ ジ (掃除)
想	ソウ ↔ ソ (愛想)	通	ツウ ↔ ツ (通夜)
頭	トウ ↔ ド (音頭)	十	とお ↔ と (十月)
読	ドク ↔ ド (読経)	端	はし ↔ は (端境期)
夫	フ ↔ フウ (夫婦)	守	まもり ↔ もり (子守り)
猛	モウ ↔ モ (猛者)	木	モク ↔ モ (木綿)
遊	ユウ ↔ ユ (遊山)	割	わり ↔ わっ (割符)
③の例			
雨	あめ ↔ あま (雨戸)	天	あめ ↔ あま (天の川)
雨	あめ ↔ さめ (春雨)	位	イ ↔ ミ (三位)
皇	オウ ↔ ノウ (天皇)	金	かね ↔ かな (金物)
木	き ↔ こ (木立)	合	ゴウ ↔ ガッ (合併)
祝	シュク ↔ シュウ (祝儀)	何	なに ↔ なん (何人)
発	ハツ ↔ パツ (出発)	人	ひと ↔ びと (何人)
目	め ↔ ま (目深)	若	わか ↔ わこう (若人)

※(注) 名詞の形だけを掲げてあるものには次のような字がある。
 頂[○]いただき 謡[○]うたい 趣[○]おもむき 虞[○]おそれ 霧[○]きり 煙[○]けむり 氷[○]こおり
 印[○]しるし 巧[○]たくみ 畳[○]たたみ 務[○]つとめ 隣[○]となり
 [○印の語は、「使用上の注意事項」に例示してあるもの。]